

## ネヘミヤ記13章「神の愛に留まる難しさ」

### 1A 混血の者 1-3

### 2A 神の宮への侵入 4-9

### 3A レビ人の欠乏 10-14

### 4A 安息日の商売 15-22

### 5A 異邦人との婚姻 23-27

### 6A 宮の汚れ 28-31

#### 1B 神の愛への不信

#### 2B いけにえの軽蔑

#### 3B 不信者との婚姻

#### 4B 善を行なうことへの倦怠

## 本文

ネヘミヤ記最後の 13 章に入ります。これまで私たちは、ネヘミヤの指導によってエルサレムの町が、内実ともに建てられたところを見ました。城壁を建て、それから律法の朗読と悔い改めの祈りを捧げ、それから盟約を結びました。そして、エルサレムに住む人々を任命し、礼拝が絶やされることのないように、捧げものについてもしっかりと守るように銘記しています。前回の 12 章では、城壁の奉献式にて、聖歌隊が城壁の上を二手に分かれて歩き、神殿で合流し、いけにえを捧げました。喜びの声を大声で言い表しました。

12 章までであれば、私たちはほっとするかもしれません。ネヘミヤ記は、しかし、主を喜んでいる民が、いかにその喜びを維持できるのか、それがとても難しいことを教えてくれます。御霊に満たされることと、御霊の中に留まることはまた別です。主の御霊に満たされて喜びに溢れ、神の愛を知ることと、その愛に留まること、そして実を結ぶことはまた別なのです。13 章は、異邦人との婚姻をしたというところで、主ではなく、世に妥協したために、礼拝そのものがなし崩しになっている姿を見ていきます。

### 1A 混血の者 1-3

<sup>1</sup>その日、民が聞いているところでモーセの書が朗読され、その中に、アンモン人とモアブ人は決して神の集會に加わってはならない、と書かれているのが見つかった。<sup>2</sup>それは、かつて彼らが、パンと水をもってイスラエル人を迎えることをせず、かえってバラムを雇ってイスラエル人を呪わせようとしたからであった。私たちの神はその呪いを祝福に変えられた。<sup>3</sup>民はこの律法を聞くとすぐに、混血の者をみなイスラエルから切り離れた。

このモーセの書は、申命記 23 章に書かれてあることです。それに基づいて混血の者たちを取り分けました。これは人種差別主義という問題ではありません。そうではなく、ここにもあるように混じり合うことによって、モアブ人あるいはアンモン人が持ちこんでくるイスラエルへの呪いが入ってくることを防ぐためでした。バラムの助言によって、イスラエル人が神罰を受けたという悲惨な出来事が歴史としてイスラエルには残っています。ネヘミヤの時代、周囲の人たちが、まさにアンモン人が有力者であったということで、まさに自分たちに差し迫った問題だったのです。

## 2A 神の宮への侵入 4-9

<sup>4</sup> これより以前、祭司エルヤシブは、私たちの神の宮の部屋を任されていて、トビヤと親しい関係にあったので、<sup>5</sup> トビヤのために一つの大きな部屋をあてがっていた。以前その部屋は、穀物のささげ物、乳香、器、またレビ人や歌い手や門衛たちのために定められていた、穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一、さらに祭司のための奉納物を保管するところであった。<sup>6</sup> この間ずっと、私はエルサレムにいなかった。私が、バビロンの王アルタクセルクセスの三十二年に王のところに行き、その後しばらくして王にいとまを乞い、<sup>7</sup> エルサレムに帰って来たからである。そのとき私は、エルヤシブがトビヤのために行った悪、すなわち、神の宮の庭にある一つの部屋を彼にあてがったことに気づいた。<sup>8</sup> 私は大いに気分を害し、トビヤ家の家財をすべてその部屋から外へ放り出し、<sup>9</sup> 命じて、その部屋をきよめさせた。そして私は、神の宮の器を、穀物のささげ物や乳香と一緒に再びそこに納めた。

城壁再建の工事のために、ペルシア王アルタクセスクセスの献酌官であったネヘミヤは、十二年の間、ユダヤの総督としてエルサレムにいました。王との約束の時が来たので、彼は王のところに戻りました。紀元前 430 年頃のことであろうと言われています。二年ぐらいだったのでしょか、三十二年、すなわち紀元前 432 年頃に、再びエルサレムに戻ってきましたが、その間に起こっていたことがこれです。

ネヘミヤが総督の時、エルヤシブが大祭司でした。彼は、城壁再建工事に携わっていた人でもあります。「大祭司エルヤシブは、その仲間の祭司たちと、羊の門の再建に取りかかった。(3:1)」とあります。そしてトビヤは、城壁工事を何とかして阻もうとした張本人であります。仕事にとりかかろうとしたユダヤ人たちに対して、「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。(2:19)」と言って蔑みました。工事がはかどっている時には、「彼らが築き直している城壁など、狐が一匹上っただけで、その石垣を崩してしまうだろう(4:3)」と言って嘲りました。城壁の高さが半分ぐらいになった時には、非常に怒り、サマリヤの総督サヌバラテなどと共に、エルサレムに攻め入り、混乱を起こそうと陰謀を企てました(4:8)。壁は破れ口がなくなり、残るは門の扉を取り付けるだけになりましたが、ネヘミヤを連れ出して会議をしようと誘い出し、彼に害を加えようと企んでいました(6:2)。そして何と、預言者を買収して、その偽預言によってネヘミヤに罪を犯させようとしたのです。このトビヤが何と、神の宮にある捧げ物のための保管所に

大きな部屋があてがわれて、そこに住んでいると言うのです！あまりにもあつてはならない、衝撃的なことが起こっています。

その理由が「トビヤと親しい関係にあった」と書いてあります。トビヤは、ユダヤ人の何人かと縁戚関係にありました(6:18)。肉のつながりは、しばしば神とのつながりを奪い取ってしまいます。神の目的よりも、肉のつながりの利害を優先させるのです。イエス様は、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。(マタイ 10:37)」と言われました。この結婚によって、エルサレムの中に、そして神殿の中枢にまで浸透してきていました。

私たちは、10章にて、盟約の中に、その保管についての誓いについて書かれていました。礼拝のために、シェケルの三分の一を献げること。それらはパンや穀物のささげ物、全焼のささげ物などのため、また祭壇で火で焼くための薪のためです。また、初物を献げること。初子も献げます。それから、祭司も、レビ人もまた生きなければいけません。彼らの生活を支えるため什一もあります。収穫の十分の一を献げ、今度は受け取ったレビ人がその中から十分の一を祭司たちのために献げます。それから、レビ人や歌い手は、祭司と共に、絶えず常駐して(交替していますが)、歌をうたうように任命されています。こういったものに使うための保管の場所が、なぜかトビヤの部屋になっていたのです。

これまでネヘミヤ記を読んできた方は、「なんで・・・」というショックを隠せないと思います。あれだけ戦って、ネヘミヤは城壁再建を成功させたのです。これはまるで、正面玄関を固めたのですが、裏口から入られてしまった状態です。敵は、「押してもだめなら、引いてみる」という手法を使います。つまり、神の働きに反対することに失敗したら、仲良くなることによって中に入ってくるのです。これを言い換えれば「妥協」という武器であります。敵は、主の命令に少しだけ従えばそれで十分だという妥協案を提出します。ファラオがモーセに対して、「いけにえを捧げてもよいが、遠くに行つてはならない」と言い、「あなたがたは、幼子は連れて行かず、壮年だけでいけにえを捧げなければならぬ。」とも言いました。しかし、主が命じられたことの全てを守らなければ、全く守っていないのと等しいのです。しかし敵は妥協をさせることによって、私たちのうちにある神の聖さを汚そうとします。

### **3A レビ人の欠乏 10-14**

<sup>10</sup> また私は、レビ人の分が支給されていなかったために、務めに当たるレビ人と歌い手たちが、それぞれ自分の農地に逃げ去っていたことを知った。<sup>11</sup> 私は代表者たちを詰問し、「どうして神の宮が見捨てられているのか」と言った。そして私はレビ人たちを集め、元の職務に就かせた。<sup>12</sup> ユダの人々はみな、穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一を貯蔵庫に持って来た。<sup>13</sup> そこで私は、祭司シェレムヤ、学者ツアドク、レビ人の一人ベダヤに貯蔵庫を管理させ、マタンヤの子ザクルの子

ハナンを彼らの助手とした。彼らが忠実な者と認められていたからである。彼らの任務は仲間に分配をすることであった。

エルヤシブが奉納物の保管庫をトビヤに与えることができたのは、それだけの空間ができていたからです。つまり、人々が神殿にシェケルを支払わなかった、また奉納物や十分の一、その他の捧げ物を持ってきていなかったからに他なりません。それでレビ人たちも支給されていないので、神の宮での奉仕が見捨てられていたのです。主のお仕事に携わることを支えることは、そのまま神を礼拝することを疎かにしないことにつながります。

そしてネヘミヤはここでも速やかに対処しました。彼はまず、代表者たちを詰問しています。それから、レビ人を元のところに集めました。それで、ユダの人々は捧げ物を持ってきました。さらに、祭司と学者、レビ人に宝物倉を管理させました。大事なのは彼らが、「忠実な者と認められていた」からであります。多くの方が能力を見ます。この人はできるのに、なんで奉仕をさせないの？という質問をこれまでも受けてきました。私は忠実さを見ています。奉仕に立つということは、忠実かどうかによって量られるからです。

<sup>14</sup> 私の神よ、どうか、このことのゆえに私を覚えていてください。私が神の宮とその務めのためにした数々の誠実な行いを、ぬぐい去らないでください。

ネヘミヤは祈りました。彼が祈りの人であったことを思い出してください。この辛い働きを、彼は独りでしなければならなかったでしょう。強く対処しなければいけません。これは辛いことです。孤独になります。悪者を演じないといけません。ですから、神の宮を愛するネヘミヤの業を覚えている唯一の方、主ご自身に報いを願ったのです。

#### **4A 安息日の商売 15-22**

<sup>15</sup> そのころ私は、ユダのうちで安息日にぶどう踏みをしている者、麦束を運んでいる者、また、ろばに荷物を負わせている者、さらに、ぶどう酒、ぶどうの実、いちじくなど、あらゆる品物を積んで、安息日にエルサレムに運び込んでいる者を見つけた。それで私は、彼らが食糧を売ったその日に、彼らを戒めた。<sup>16</sup> また、そこに住んでいたツロの人々も、魚などあらゆる商品を運んで来て、安息日に、しかもエルサレムでユダの人々に売っていた。<sup>17</sup> そこで、私はユダの有力者たちを詰問して言った。「あなたがたが行っているこの悪事は何か。安息日を汚しているではないか。<sup>18</sup> あなたがたの先祖も、このようなことをしたので、私たちの神はこのすべてのわざわいを、私たちとこの都の上にもたらされたのではないか。それなのに、あなたがたは安息日を汚して、イスラエルの上にもたもや御怒りを招こうとしている。」

まずユダヤ人の中で商売をしている人々が、安息日にいました。ネヘミヤは彼らを咎めています。

それだけでなく、ツロからやって来て安息日に、エルサレムの中で商売をしている人々がいました。ツロはレバノンのほう、地中海に面した都市で貿易をする商人ですから、そこに魚も商品に入っています。

このように、神への礼拝が疎かにされた時に、すべての事がなし崩しになってきたのです。神への礼拝が固守できない時に、自分の生活の中でたちまちこの世がなだれ込んでいきます。そして、この世と全く変わらなくなり、キリスト者であるという意味が見いだせなくなってしまうのです。

そこでネヘミヤは、代表者たちを詰問して咎めています。そして大事なのは、彼がここまで激しく、強く迫っているその根拠が、過去の預言者の言葉だったのです。エレミヤ書 17 章 20-27 節に、まさにこのことをすればエルサレムに火がつけられる、つまり滅びるということをエレミヤは語っていました。ですからネヘミヤは、今、激しくなっているけれども、もっともっと恐ろしいことが、これを続けていたらエルサレムに下るといふ懼れがあったので、妥協なく、強く対処しました。

こういうことを見ると、表面的に私たちは裁いてしまいます。「あまりにもネヘミヤは強すぎる。そこまでしなくてよいのでは？」と思います。そして、裁くことさえします。「ネヘミヤは、憐れみのない無慈悲な人だ。」ということです。パウロが、靈的にはまだ幼子であったコリントの人たちから、近親相姦を犯していた男を教会から取り除きなさいと言いましたが、それによってかなり批判されました。パウロ自身、涙をもって行ったことであり、愛によるものなのに、その靈的に幼いコリントの人たちには、厳しさが分からなかったのです。コリント第二の手紙は、パウロがいかに愛しているかを伝えている内容になっています。

<sup>19</sup> 安息日の前、エルサレムの門に夕闇が迫ると、私は命じて扉を閉めさせ、安息日が終わるまでは開いてはならないと命じた。そして、私の配下の若い者の何人かを門の見張りに立て、安息日に荷物が持ち込まれないようにした。<sup>20</sup> それで商人やあらゆる品物を売る者たちは、一、二度エルサレムの外で夜を過ごした。<sup>21</sup> そこで、私は彼らを戒めて言った。「なぜ、あなたがたは城壁の前で夜を過ごすのか。もう一度このようなことをすれば、私はあなたがたを処罰する。」その時から、彼らはもう安息日には来なくなった。<sup>22</sup> また私はレビ人に、安息日を聖なるものとするために、彼らが身をきよめ、門の見張りとして来るように命じた。私の神よ、このことにおいても、どうか私を覚えていてください。そして、あなたの豊かな恵みにしたがって私をあわれんでください。

トビヤを追い出した時、追い出すだけでなく、その保管する部屋に管理する人をあてがいましたが、こちらもそうです。安息日に門の見張りをする人たちを立てました。それでも、夜に門の外で待っている人たちがいるのですから、ネヘミヤはやってきて脅しています。それで、レビ人は元々、門衛に任命されていたから、改めて聖別し、見張りをさせました。

ここで再びネヘミヤが、神に憐れみを祈っていますね。このような判断を下すのは本当に辛いことです。モーセも、またエレミヤも、民に対しては厳しいことを語りますが、主に対して祈る時は、とても弱くなっているのを見ます。神の義なる言葉に立って語らなければいけないので、厳しいのですが、本当は自分の心は、その重荷に耐えられないと感じているのです。そこで、絶えず憐れみを求める祈りを献げます。

## **5A 異邦人との婚姻 23-27**

<sup>23</sup> そのころまた私は、アシュドデ人、アンモン人、モアブ人の女を妻にしているユダヤ人たちに気がついた。<sup>24</sup> 彼らの子どもの半分は、アシュドデのことばか、あるいはそれぞれほかのことばを話して、ユダヤのことばが分からなかった。<sup>25</sup> そこで私は彼らを詰問してののしり、そのうちの数人を打って毛を引き抜き、神にかけて誓わせて言った。「あなたがたの娘を彼らの息子に嫁がせてはならない。また、彼らの娘をあなたがたの息子、あるいはあなたがた自身の妻としてはならない。<sup>26</sup> イスラエルの王ソロモンも、このことで罪を犯したではないか。多くの国の中で彼のような王はいなかった。彼は神に愛され、神は彼をイスラエル全土を治める王としたのに、その彼にさえ異国人の女たちが罪を犯させてしまった。<sup>27</sup> あなたがたについても、異国人の女を妻とし、私たちの神の信頼を裏切るという、この大きな悪が行われていることを聞かなければならないのか。」

混血はいけないという強い悔い改めであの盟約は始まったのに、ついにヘブル語が離せない子が出てくるまでの混血が進んでいました。周囲の異邦人、アシュドデ人（ペリシテ人の一部かもしれませんが）、そしてアンモン人とモアブ人です。アンモン人とモアブ人は、具体的に集会から追放しなければならないというモーセの律法がありましたね。

ネヘミヤは、これまでの中で最も厳しい対処をしています。実際に数人を打ち、毛まで引き抜いています。以前、エズラ記においても、同じ問題がありました（9章）。指導者たちの中にまで異邦人と結婚した者がいるという話を聞いたエズラは、自分の髭を抜いて呆然としていました。彼は自分を打ち叩き、痛めつけて罪を犯したことの嘆きを言い表していましたが、ネヘミヤはそれを彼ら自身にさせているのです。「お前たち自分の罪を悔いて、悲しみなさい！」とさせています。

そして、ネヘミヤはこんなに厳しい対処をしている根拠を挙げています。まさに、エルサレムの王ソロモンがこの間違いを犯したから、罪を犯していきました。彼が神に愛されている、恵みを受けた偉大な王であったことを強調しています。それほどの恵みを、受けとらないで、自分の心を狭くして世に妥協したのです。当時は政略結婚による平和が普通でした。ですから、彼は神の平和ではなく、世の方法で平和を求め、多くの異邦人の女を愛したのです。神の愛ではなく、世の愛が入り込んでしまいました。それで、その後の禍根が王国の分裂、そして離散なのです。

## 6A 宮の汚れ 28-31

そして、なんでこんなに墮落が急に起こったのか、その根本の問題をネヘミヤは明かします。

<sup>28</sup> 大祭司エルヤシブの子エホヤダの子の一人は、ホロン人サンバラテの婿であった。それで、私は彼を私のところから追い出した。<sup>29</sup> 私の神よ、どうか彼らのことを覚えていてください。彼らは祭司職を汚し、祭司職とレビ人たちの契約を汚したのです。

大祭司エルヤシブが、アンモン人トビヤに奉納物の保管庫を使わせたのか、と言いますと、彼の孫が、もう一人の敵サンバラテの婿だったのです。サンバラテの娘とエルヤシブの孫が結婚していました。トビヤとサンバラテは結託していますから、それでトビヤに見返りとしてその部屋をあてがっていた、ということになります。政略結婚だったのです。周囲の有力者と仲良くして、それで自分たちの地歩を固めていたのです。新約聖書時代、祭司長たちがサドカイ派で、同じような感じでローマとの政治的妥協の中で高い地位を固めていました。それに真っ向から対抗されたのがイエス様です。宮清めは、アンナス家の息子たちのビジネスと化していた神殿を、祈りのために清められたに他なりません。

彼らがそのような世との妥協をしているのですから、当然ながら民は聖さを失います。奉納物も献げるのはやめましょう。奉納物がないから、レビ人も生活が逼迫して家に帰ります。主への礼拝に妥協があるのですから、当然、安息日を守る情熱も失せてきます。霊的指導者の張本人の家族が異邦人との結婚をしているのですから、他の民族と結婚する人々も出てくるわけです。すべては、主との愛の関係の中に、他の要素を取り入れたせいでもあります。

ネヘミヤの時代あるいは、そのすぐ後の時代にあったものを預言したのが、旧約聖書の最後の書、マラキ書です。ユダヤ人たちが礼拝を疎かにした、その原因は祭司たち本人にあったようです。大祭司エルヤシブを始めとする祭司たちが、どのように主の心から離れていったのか、その姿を描いています。彼らがどのようにして、妥協していったのかがよく分かります。

1章2節にこうあります。「わたしはあなたがたを愛している。——【主】は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか』と。エサウはヤコブの兄ではなかったか。——【主】のことば——しかし、わたしはヤコブを愛した。」礼拝に喜びを無くした、楽しくなくなったというすべての原因はここにあります。神が自分たちを愛しておられるという確信が揺らぐ、その意識が薄れるときです。

## 2B いけにえの軽蔑

神が自分たちを愛しておられることに確信が持てなくなってきた祭司たちは、当然、神への愛も冷えてきます。いけにえを疎かにし始めました。「あなたがたは盲目の動物を献げるが、それは悪

いことではないのか。足の萎えたものや病気のを献げるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところへそれを差し出してみよ。彼はあなたを受け入れるだろうか。あなたに好意を示すだろうか。——万軍の【主】は言われる——(1:8)」上に立つ人に対して捧げることなど到底できないような捧げ物を、神に対しては平気で捧げるようになっていました。最上のいけにえでなければいけないのに、残り物を捧げるようになってきたのです。

### 3B 不信者との婚姻

ついに祭司たちは、この世が楽しくなって、この世に手を出します。それは女です。何か楽しいことがないかな、と思って、その淋しさを紛らわしてくれるのは女であります。それも、神を愛する女性ではなく、この世のことを良く知っている女であります。そこで、マラキ 2 章 11 節に書いてありますが、外国の女と結婚するのです。そして、なんと祭司の家族の中からめとった女と離縁するのです。「あなたがたはもう一つのことをしている。あなたがたは、涙と悲鳴と嘆きで、【主】の祭壇をおおっている。(2:13)」とあります。

自分の一番身近にいる、主を愛する人をないがしろにし始めたら、それは霊的危機の始まりです。自分の伴侶でなくとも、教会でいつも時間を過ごしている兄弟姉妹との交わりが楽しくない、と思えば危険信号です。代わりに自分の淋しさや空しさを補完してくれる親密な関係を求めるようになります。

### 4B 善を行なうことへの倦怠

そして彼らは、「悪を行う者もみな【主】の目にかなっている。(2:17)」とつぶやきました。なぜなら、自分たちが良いことを行なっても、何ら報いがないではないか。悪いことを行なっている者も、祝福されているようだ、と思うわけです。いいえ、愛の行ないは必ず報いがあります(ヘブル 6:10)。

このような霊的な倦怠が、大祭司エルヤシブやその祭司の一家にやってきたのではないかと考えられます。宗教という権威をもって周囲の有力者といっしょにうまくやっていくほうが楽ですから。そして、そのほうが寛容なように見えます。パウロが、コリントの教会で起こっている、近親相姦の罪を犯した男をそのまま受け入れていることを咎めましたが、それも自分たちが寛容だと高慢になっていたのです。パウロは言いました、「Ⅱコリ 6:14-15 不信者と、つり合わないくびきをともしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。」

ですから私たちは、主のみを愛していくことの必要性が、痛いほど分かるのではないのでしょうか？主のみを愛することは偏狭である。私たちは、他のことも大切にしていかなければならない、と言います。主を愛することを知らずして、他のものを大切にできるのでしょうか？いいえ、主のみを愛するからこそ、また主を愛する兄弟を愛するからこそ、他のものも大切にできるのです。そし



て、その愛は、神の宮を愛したネヘミヤと同じように、礼拝への情熱の中に表れるのです。

<sup>30</sup> 私は異教的なもの一切から彼らをきよめ、祭司とレビ人のそれぞれの務めにしがって職務に就かせ、<sup>31</sup> 定められた時に行う薪のささげ物と、初物についても規定を定めた。私の神よ、どうか私を覚えて、いつくしんでください。

他にも、モーセの律法にしがって、あの時に盟約として定めたことをネヘミヤは断行しました。彼は署名しましたが、彼だけは最後までその責任を負いました。本当に彼は真実なリーダーです。初めに神の御言葉によって定めたことを、最後までやり通す人であります。そして孤独であっても、主が憐れんでくださる、報いてくださるのです。

これでネヘミヤ記は終わりますが、変な終わり方をしていますね。ハッピーエンドではありません。しかし、ここで主が伝えたいことは、霊的改革に終わりはないのだよ、ということでありましょう。不断の努力によって、いつまでも続けなければいけないものであります。